1、坂根芳郎氏収集考古資料から（1）

－宇多野御池町採集の平安時代の古瓦－

高 橋 美久二（館長補佐兼資料課長）

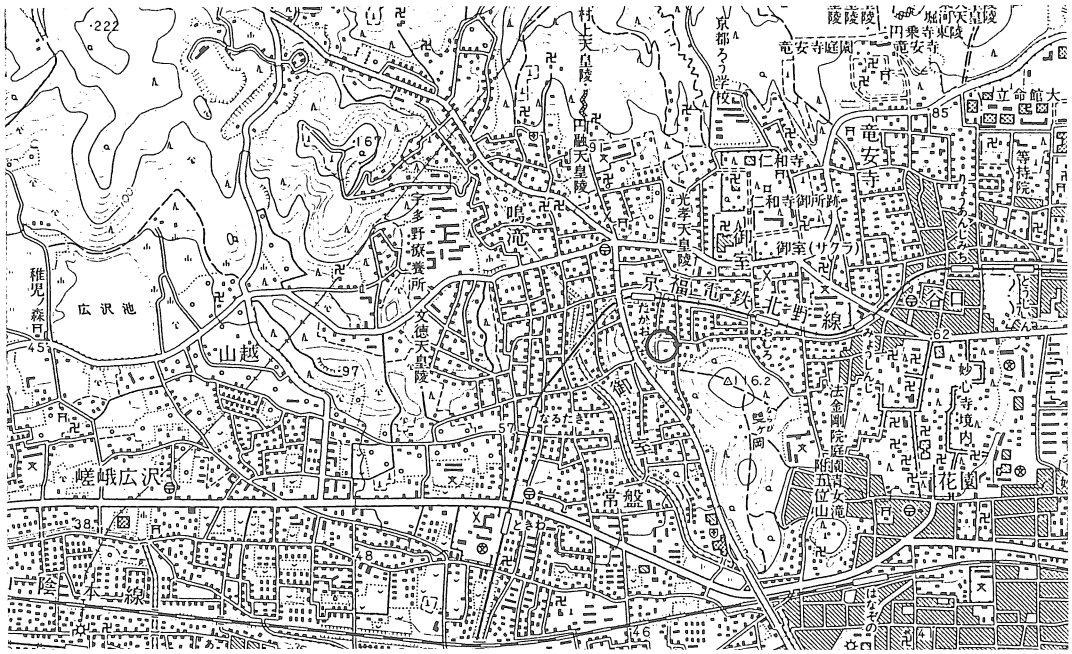
1、はじめに

平成2年度に受け入れた考古資料の中に、坂根芳朗氏（1910～1988）が永年にわたって収集されたものを遺族の配慮で当館に寄贈いただいた資料565点がある。

坂根芳朗氏は、明治43年生まれで、昭和4年から昭和40年まで京都府職員として勤務された。京都府職員の頃から文化財に関心を持ち、その保護啓蒙に尽力され、退職後「京都の文化財を守る会」の会員として活動された。また昭和51年から京都府文化財保護指導員としても活躍もされた。その功績が認められ、昭和60年には京都府文化財保護基金理事長から感謝状を贈られ、京都府教育委員会から京都府教育功労賞を受けられた。夫人の坂根嘉子氏の話によると、考古資料の収集を始められたのは、京都府文化財保護課の建造物係の専門職員であった後藤柴三郎氏と知り合われたのがきっかけであったという。後藤氏は古瓦収集家としても知られていたことから、昭和35年頃から古瓦を中心に、各地に出かけて考古資料を集めたということである。

坂根芳郎氏から寄贈を受けた資料は次の通りである。

(1)栗栖野瓦窯跡　軒平瓦他	46点
(2)幡枝南庄田瓦窯跡　軒平瓦他	50点
(3)江文寺跡　灰釉陶器他	11点
(4)一乗寺遺跡　縄文土器他	20点
(5)西賀茂瓦窯跡　軒平瓦他	9点
(6)出雲寺跡　土師器	2点
(7)仁和寺跡　軒平瓦	1点
(8)仁和寺院家跡　軒平瓦他	26点
(9)法金剛院跡　軒平瓦他	7点



第1図　宇多野御池町付近地図

(10)乾山泉谷窯跡　陶器　5点
(11)妙心寺　軒丸瓦他　3点
(12)京都御所　軒丸瓦　6点
(13)平安宮跡　軒平瓦他　129点
(14)神泉苑跡　緑釉陶器他　50点
(15)東寺跡　平瓦　2点
(16)西寺跡　軒平瓦他　3点
(17)醍醐寺跡　軒平瓦他　7点
(18)伏見城跡　軒丸瓦　2点
(19)長岡宮跡　須恵器他　12点
(20)宝菩提院跡　軒平瓦　1点
(21)飯岡車塚古墳　埴輪　3点
(22)普賢寺跡　軒平瓦他　3点
(23)燈明寺山古墳　埴輪他　11点
(24)王子瓦窯跡　軒平瓦他　20点
(25)観音芝廃寺　軒丸瓦他　6点
その他各地採集資料　160点

その他各地採集資料には、丹後の橋木遺跡、銚子山古墳、浜詰遺跡、神明山古墳、奈良県平城宮跡、本薬師寺、川原寺跡、橘寺、滋賀県紫香楽宮跡、安土城跡、兵庫県田能遺跡、愛知県名古屋城、東京都大森貝塚などの資料がある。

ここに紹介しようとする資料は、(8)仁和寺院家跡軒平瓦他26点としたものを中心とする。

2、資料の概要

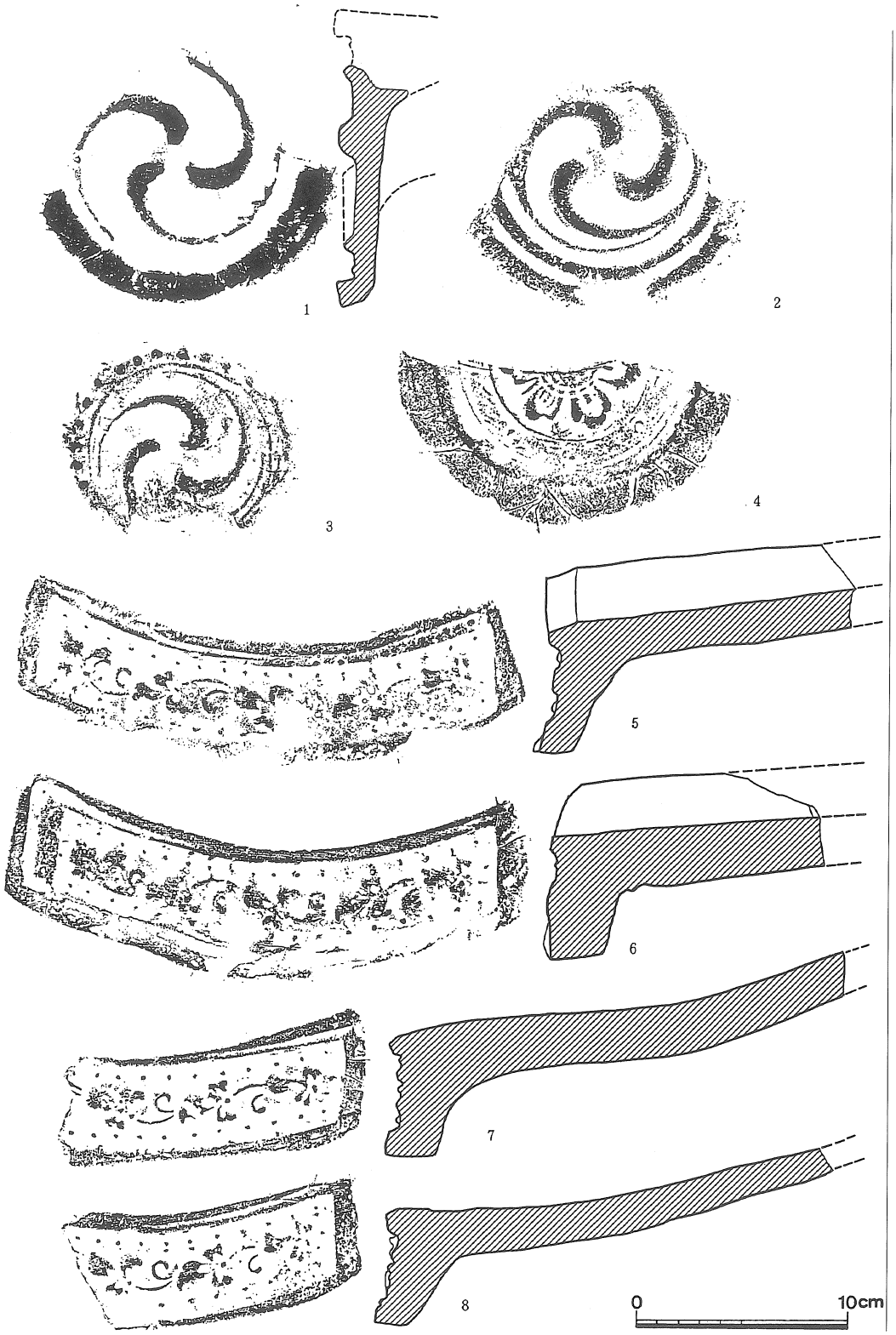
坂根氏収集資料には、ほとんどに採集場所と採集した日付が直接墨で書付けられるか、紙片を貼り付けてそれに書き込みがしてある。しかも、一括して採集したものは同じ箱や袋に入れて、一括資料であることが示されている。このように考古資料としては、基本的なことが忠実に行われており、その意味ではきわめて貴重なものである。また、遺物に書き込む以外に、坂根氏は収集資料を写真に撮ったものをアルバムに貼って整理してある。そのアルバムは日付ごとに、目次を付けて整理し、時には出土状況の写真もつけてある。したがって、このアルバムの目次が踏査日誌にもなっている。さらに、瓦にはとくに愛着があったとみえ、瓦の拓本帳が作ってあった。自分の収集資料の拓本帳と別に他人の資料を拓本帳にしたものとが作ってあった。

生前に坂根氏と懇意にしていた筆者は、後者の拓本帳を見せてもらったり、その一部をコピーさせてもらったことはあったが、前者の収集資料の拓本帳を見せてもらったことはなかった。したがって、このように多量に坂根氏の収集資料があったとは、知らなかったのであった。

このように遺物に直接書き込んだものと、アルバムと拓本帳の三者を照合することによって、資料としての確実性が増すとともに、遺物に書き込みがしてない場合にも出土地や収集の日付を知ることができることがある。

今回報告する資料は、アルバムに「御室宮跡　右京区宇多野御池町　36.1.22　36.11.26　37.11.23」と書かれているものである。もちろん、「36.1.22」と書かれたものが最初に踏査された日付で、以後の日付は余白に追加して書き込まれたものである。

当館に受け入れた宇多野御池町採集の資料は、平瓦3点、丸瓦14点、軒平瓦6点、軒丸瓦1点、鬼瓦2点がある。さらに採集の日付ごとに見て行くと、「36.1.22」とあるもの（整理番号8－1）は丸瓦1点（第3図－14)、「36.11.26」とあるもの（整理番号8－2）は平瓦2点、丸瓦1点、軒平瓦4点（第2図－5～8)、「36.12.3」（アルバムの目次や拓本帳には、37.11.23とあるが、同一個体の現物にはこう書かれている）とあるもの（整理番号8－3）は丸瓦1点、軒丸瓦1点（第2図－1）がある。また、「宇多野御池町」または「宇多野」とだけ書かれ、日付が書かれていないものが2グループに分けてあり、そのひとつ（整理番号8－4）は平瓦1点（第4図－16)、鬼瓦2点（第3図－12、13）があり、またひとつ（整理番号8－5）は丸瓦10点、軒平瓦2点（第3図－9、10）が



第２図　宇多野御池町出土瓦（1）

ある。アルバムにはこの鬼瓦2点の写真が貼られその脇に「36.11.26」の日付が書き込まれ、拓本帳にはこの軒平瓦2点の柘影が貼られその脇にやはり「36.11.26」の書き込みがある。あるいは、この日付不詳に分類したもののほとんどは昭和36年11月26日に採集されたものかとおもわれる。また、現物には記述がなく、出土地不詳と分類したもの（整理番号30－1）の中に拓本帳の記述によって宇多野御池町出土とわかった軒平瓦1点（第3図－11）がある。さらに、寄贈を受けたものの中に現物はないが、拓本帳に「宇多野御池町36.11.26」と書かれた軒丸瓦3点（第2図－2、3、4）の柘影が載せられている。

3、遺跡の概要

さて、これらの多量の瓦が採集された遺跡であるが、「宇多野御池町」という地名をたよりに現地付近を踏査してみたが、昭和36年当時とは景観が大きく変化して、住宅密集地となり坂根氏が採集された現地をつきとめることはできなかった。現宇多野御池町は京都市の西北郊にあたり、北側は北から延びた丘陵の先端に築かれた光孝天皇後田邑陵があり、その北には京都と梅ケ畑、高尾や周山を結ぶ古くからの街道、周山街道が走る。西側には国道162号が走りその西に御室川が開析した谷がある。東北には御室仁和寺が、東南には名勝双ケ岡が接するような位置にある（第1図）。宇多野御池町は近世には福王子村の字名であったが、明治7（1874）年に福王子村と鳴滝村、山越村とが合併し、新たに宇多野村となったため、宇多野御池町と称されるようになったものであった。

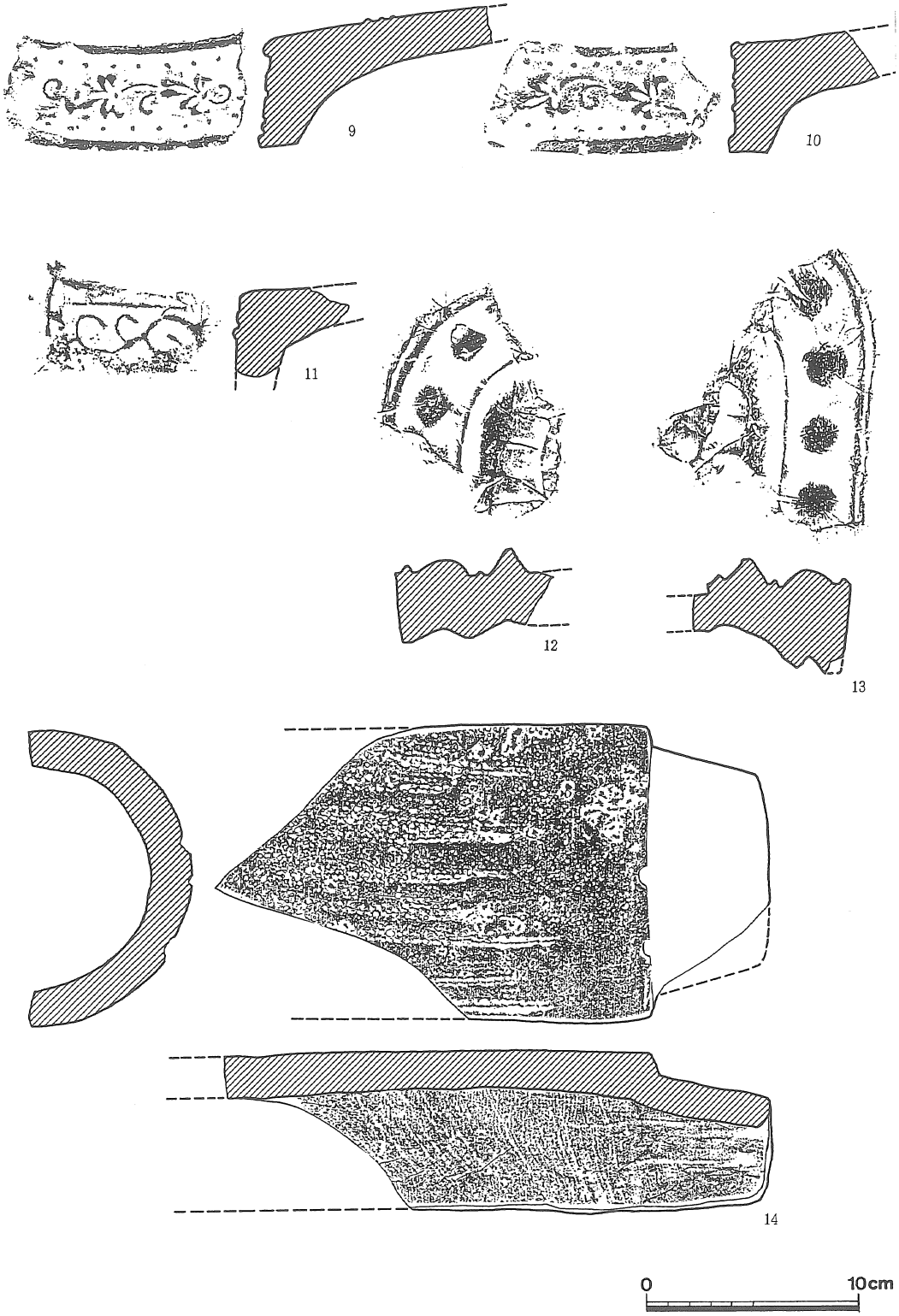
宇多野御池町の遺跡と深く関わるのが仁和寺の院家である。仁和寺は光孝天皇によって仁和2（886）年に御願寺として建立が始められ、仁和4年に宇多天皇によって落慶供養された。以来仁和寺の周辺には、二里四方にわたって多数の子院（院家）が建ち並び、13世紀に成立した『仁和寺諸堂記』（『群書類従』巻430所収）には74の子院堂舎を掲げ、その開基などが解説されている。また、近世まで書き継がれた『仁和寺諸院家記』（『群書類従』巻59所収）には78の子院（院家）の歴代の記録がある。宇多野御池町採集の瓦がどの院家に属すものであるかは、にわかには定めがたいが杉山信三氏が推定した「南院」付近にあたる。(注1)

さらに、宇多野御池町の「御池」の地名は南院の阿弥陀堂前にあった池から起こったらしい。それは、『仁和寺諸院家記・尊寿院本』（杉山信三『院家建築の研究』所引）に「常瑜伽院南北ハ南院之跡也、今田地計也、三四段許歟、御池昔ハ南院之池也」とあって、中世に南院の跡に建立された「常瑜伽院」の池が南院の「御池」であったと称しているからである。

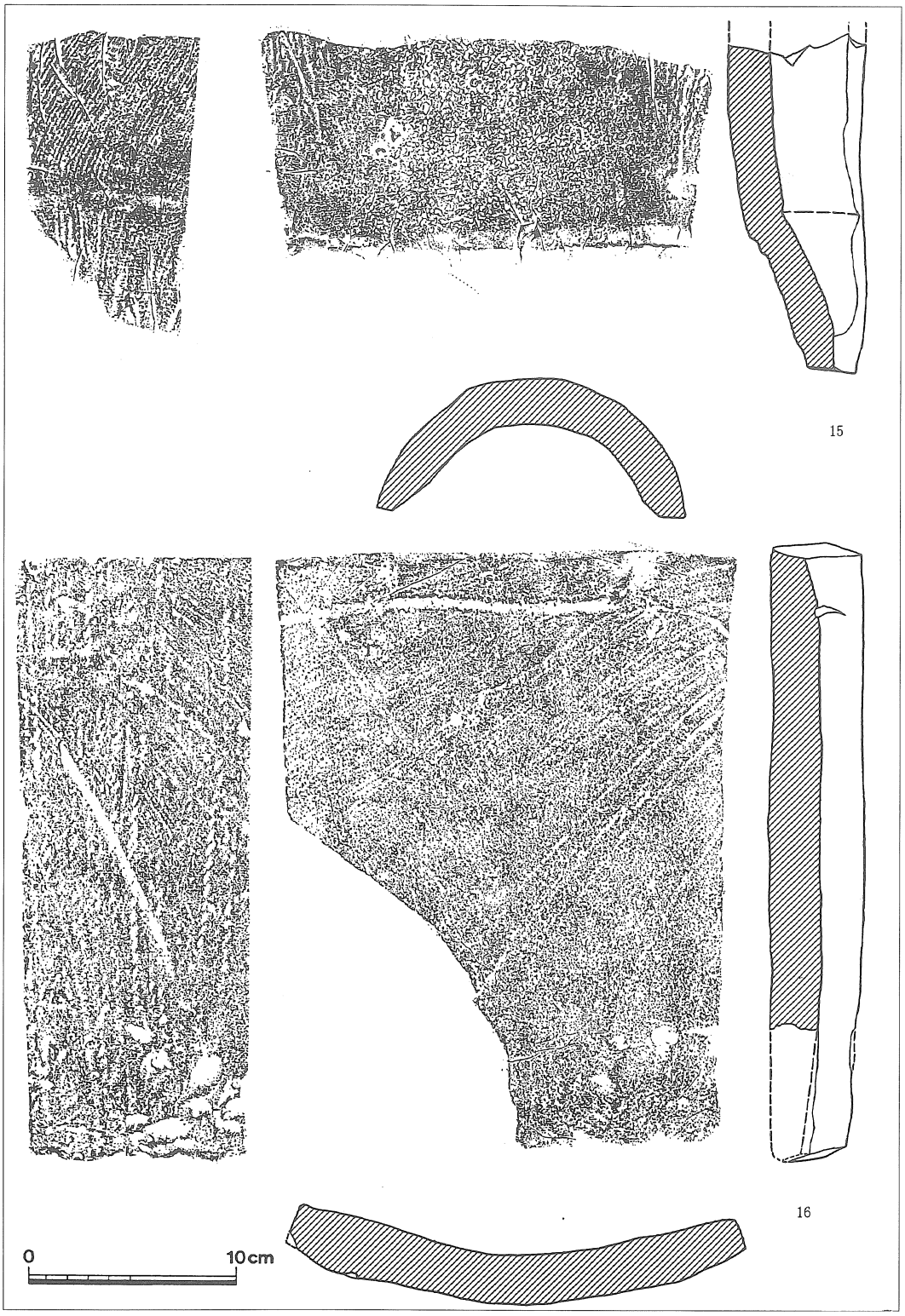
坂根氏採集の資料は、出土地の地名や出土の日付などから、杉山信三氏の教示によると、その場所はあるいは昭和35年11月と翌年1月に発掘調査して、仁和寺南院の一間四面堂跡をみつけた場所そのものではないかとのことである。仁和寺南院の報告書では「調査後1年経過して昭和37年1月には、この地に住宅がたてならび、かつてのおもかげは全くなくなっていた。」とある。(注2) そうすると、坂根氏は発掘中もしくは発掘調査直後に同地を訪れ、最初の1枚の瓦を採集し、さらに十カ月後の宅地化が進んだ頃に多量の瓦を採集したとみられる。

4、資料の観察

坂根氏が採集した宇多野御池町採集の瓦類のうち、軒丸瓦は現物の残っていないものも含めて4点（第2図）がある。1～3は三巴文で、1、2は外区に珠文がなく、3は外区に密な珠文をいれる。1は焼成があまく、表面が黒く、内部は白っぽい。平安京周辺の窯跡産のものであろう。2、3は現物がないので産地



第３図　宇多野御池町出土瓦（2）



第４図　宇多野御池町出土瓦（3）

第５図　宇多野御池町出土瓦写真

を推定することはできない。4は六葉の宝相華文を入れ、外区にも半截した宝相華文を入れるようである。同文の軒丸瓦は平安京神泉苑周辺[注3]と、愛知県半田池周辺窯跡群の半田池古窯[注4]、濁池北窯跡[注5]で出土している。いずれも平安時代後期のものであろう。

軒平瓦は6点（第３、４図）がある。5～10は同文で、内区に右から左に流れる扁行宝相華唐草文を五転させ、上下の外区に珠文を入れる。9は右半分の破片であるが、右外区にも珠文を入れ、右端の宝相華文の基部が蕨手状に湾曲した状態が表現されている。5～8には右外区の珠文帯がなく、宝相華文の基部もない。9の笵を改刻し、両端を切り縮めていることがわかる。これらはいずれもきわめて堅く焼き締められ、瓦当面および凹面にだけ分厚く灰釉がかけられている。製作方法は、平瓦の広端部の先端を折り曲げて木型に押し付け、凸面側にやや量の多い粘土を補充して顎をつくり、周囲をヘラ調整している。同文の2種類とも仁和寺南院の発掘調査で出土している。尾張産の瓦と思われるが、まだ窯跡では出土したことを聞かない。11は唐草文軒平瓦の左端の断片である。京都産のものであろう。

鬼瓦は2点（第３図）あるが、同一個体の破片の可能性が高い。型づくりで、どちらも周囲の珠文帯の破片で、堅く焼き締められ、表面に灰釉のかかった部分がある。尾張産のものである。

丸瓦は14点（第３・４図）、平瓦は3点（第４図）ある。いずれも、凹面に細かい布目、凸面に縄叩きがあり、それが部分的にナデで消されている。堅く焼き締められている。とくに丸瓦の凸面には分厚い灰釉がかけられているものが多い。その他の面や平瓦にも部分的にわずかに灰釉がかかったものがある。尾張産であろう。

5、おわりに

坂根氏が昭和36年11月頃に、ほぼ一箇所で採集されたと思われる平安時代後期（12世紀）の瓦の一群を紹介した。その瓦のほとんどは尾張産のものであった。それらが出土した遺跡は、仁和寺の院家跡の一部南院跡からの出土であろうと思われるものであった。仁和寺南院からは過去の調査によっても、尾張産瓦が出土した。その全容は明らかにされていないが、「意識的に灰釉をほどこしたと見られる」瓦が3分の2以上あることが指摘され、荘厳をきわめた南院釈迦堂跡（長承4＝1135年供養）の可能性が指摘されている。(注6) 今回の観察によっても、丸瓦凸面や軒瓦表面のみに分厚い灰釉が施されていることが確認された。これは、平安時代中期までに平安京外で唯一の瑠璃瓦葺きであった仁和寺円堂院を意識したものであることが考えられる。

平安時代後期には、京都で盛んになった造寺造仏のために、全国各地から瓦が運ばれてきた。(注7) 尾張産の瓦もそのひとつであるが、その出土地はきわめて限定される。広大な平安京ではほとんど出土しないし、当時もっとも造寺造仏が盛んであった洛東白川でも全く出土しない。尾張産の瓦のまとまった出土地としては、鳥羽離宮東殿等(注8)と仁和寺南院があるのみである。断片的な出土地でも、平安京神泉苑付近、平安京右京八条二坊(注9)、仁和寺円堂院(注10)、法金剛院(注11)などしかない。今回紹介した資料は尾張産瓦のまとまって出土した資料として注目される。

本稿を書くにあたり、故坂根芳郎氏夫人坂根嘉子氏、（財）京都市埋蔵文化財研究所　杉山信三、鈴木久男、百瀬正恒の各氏、奈良国立文化財研究所　上原真人氏、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　土橋誠氏にお世話になった、記して感謝したい。

（注1）杉山信三『院家建築の研究』（吉川弘文館、1981年）

（注2）杉山信三『院の御所と御堂－院家建築の研究－』（奈良国立文化財研究所学報第11冊、1962年）

（注3）稲垣晋也『古代の瓦』日本の美術66（至文堂、1971年）

（注4）上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」（『古代研究』13・14、1978年）

（注5）柴垣勇夫「尾張における平安末期の瓦生産」（『愛知県陶磁資料館研究紀要』 1、1982年）

同「平安京へ運ばれた瓦」（帝塚山考古学研究所『古代の瓦を考える』1986年）

（注6）（注2）に同じ。

（注7）高橋美久二「平安時代後期の地方瓦窯と京都への供給」（『京都考古』12、1975年）および（注4）、（注5）文献。

（注8）中村直勝「安楽寿院」（『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊、1925年）

京都市文化観光局文化財保護課『京都市埋蔵文化財年次報告　1972』（1973年）他

京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和58年度』（1984年）他によると、鳥羽離宮跡では、第7,8,10,86,96,119,121,122,123,124,130,136 次 調査等で尾張産瓦が出土している。

（注9）京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』（1987年）

（注10）京都市埋蔵文化財研究所『仁和寺境内発掘調査報告』（1990年）

（注11）中谷雅治「法金剛院境内出土の瓦」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1970年）